



活動報告

身近な鳥の増減が見えてきた！ ～ベランダバードウォッチ繁殖期の調査報告～ 平野敏明・植田陸之

ベランダバードウォッチをスタートさせて今年で7年目になりました。調査に参加いただいた皆さんのおかげで身近な鳥の生息状況のデータを積み重ねることができ、増えている鳥、減っている鳥などが徐々に見えてきました。これまでにわかってきた結果についてご報告いたします。

増えた鳥・減った鳥

増減の解析はTRIMを使用しました。ベランダバードウォッチで記録率の高い上位8種について、4年以上調査が行なわれている調査地を対象に増減を調べると、統計的に有意だとは言えないものの、増加傾向または減少傾向の種が見えてきました(図1)。増加傾向にある種は、キジバト、シジュウカラ、メジロ、ムクドリ、ヒヨドリ、減少傾向の種は、スズメ、ツバメ、ハシブトガラスでした。

キジバトの個体数指標は、2005年を1とすると2011年では1.648となり、年変化率4.5%の増加を示しました。同様にほかの4種の年変化率は、シジュウカラで1.1%、メジロで6.3%、ムクドリで7.8%、ヒヨドリで2.4%でした。樹林性の鳥が多いという傾向が見え、街路樹や公園の木が生長しているのが一因でしょうか？

一方、減少傾向のスズメは2005年を1とすると2011年では個体数指標が0.84で年変化率-3.6%の減少を示しました。ほかの2種の年変化率は、ツバメで-3.0%、ハシブトガラスで-5.2%でした。スズメは1960年代と比べて10分の1程度になったともいわれています(三上 2009)。今回の結果はその減少が現在も続いているのではないかということを示唆しています。なお、減少の著しかったハシブトガラスのデータを見てみると、2005年にいくつかの調査地で偶然に多くの個体が記録されたことが影響したようです。

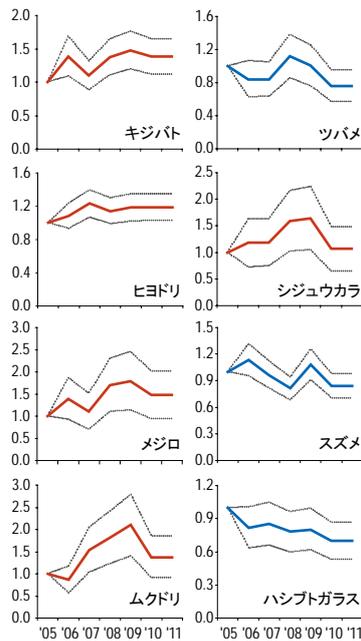


図1. 身近な鳥8種の2005～2011年の記録個体数の変化。個体数は2005年の個体数を1とした指数で示した。

この夏の鳥の状況の特徴

今年の各種鳥類の記録率の季節変化を例年と比べてみました。すると、多くの種が過去の季節変化と似たような変動をしたなかで目立ったのがスズメとムクドリでした(図2)。スズメは例年に比べて7月の記録率が低く、ムクドリは6月の記録率が著しく低かったのです。これは今年しか調査していない場所など含むすべての調査地の結果でも、これまで継続して調査されてきている場所だけでも、同様でした。つまり今年は両種の繁殖期後期の記録率が低かったようなのです。なぜ低かったのでしょうか？もしかすると、今年のスズメとムクドリの繁殖成績が悪く、それがこのような変化を示したのかもしれませんが。今年は梅雨入りが早く、暑くなったり涼しくなったり寒暖の差の激しい年でした。こうした不順な天候が影響して十分な食物を確保できなかったり、暑さでヒナが弱ったりしたのかもしれませんが。

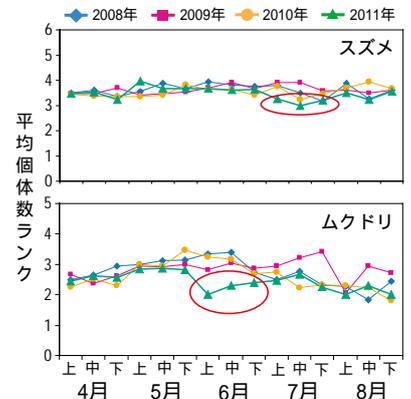


図2. スズメとムクドリの平均個体数ランクの季節変化。

調査への参加のお願い

ベランダバードウォッチの情報が徐々に蓄積され、経年的な変化を明らかにすることができるようになってきました。ただ、参加していただく方はあまり増えていません。より多くの場所の情報が集まることによって、ハシブトガラスで見られたような偶然の影響を減らし、都市部と農村部の違いなどより多くのことがわかるようになります。TRIMというソフトは欠損値を補正して個体数指標を解析してくれます。毎回調査できなくても、できるときだけでも結構ですので、ぜひ、調査に参加してください。

引用文献

三上 修. 2009. 日本におけるスズメの個体数減少の実態. 日鳥学誌 58: 161-170.

活動報告

レーダーで探る
タカが上昇気流をつかむ場所

植田睦之

上昇気流をつかむ場所がわかる？

9月12日から18日まで、信州ワシタカ類渡り調査研究グループにご協力をいただき、タカの渡りの有名な観察地、長野県白樺峠でレーダーを使ったタカの渡りの調査を行ってきました。この調査の目的は、タカの移動する場所や上昇気流をつかむ場所を正確に把握することです。



写真. 白樺峠でクルクルまわるレーダー。

飛んでくるタカを見ていると、「あの尾根の上で上昇気流をつかんだかな」と思ったりしますが、人の距離感覚はあまりあてにならないもの。実際の上昇気流をつかんだ場所はその尾根よりずっと手前だったりします。レーダーを使うことにより、タカが飛んでいる位置を正確につかむことができます。さらにこのタカの位置情報と地形や風向を重ね合わせて解析することにより、地形や風向からタカの渡りや上昇気流をつかむ場所を推定できるようになれば、今後問題になってくるかもしれない風力発電施設でのバードストライクに対し、風車立地の計画段階で、バードストライクのリスクを軽減できるかもしれない、というのがその先の狙いです。

東斜面で上昇するサシバとハチクマ

最近の白樺峠のタカの渡りは徐々に早くなっているというので、9月12日から18日までの日程としたのですが、この期間は標高の高い白樺峠でこそ気温は25度程度だったものの下界は30度を越える夏のような日々。そのせいか、残念なことにサシバやハチクマはあまり渡りませんでした。それでもそれなりのデータはとることができました。以下に結果の概要をご紹介します。

今回の調査では、サシバ68か所とハチクマ64か所の上昇気流をつかんだ場所を把握することができました。その位置を地図上に落としてみると、そのほとんどが集中する場所がありました。それは丸山の山頂南東側の東斜面です(図1)。調査期間を通して強くはありませんが東よりの風が吹いていました。オジロワシやオオワシは斜面に風がぶつかってできる斜面上昇流を利用して飛びます(植田・福田2010)。サシバやハチクマも同様に東からの風が東斜面に

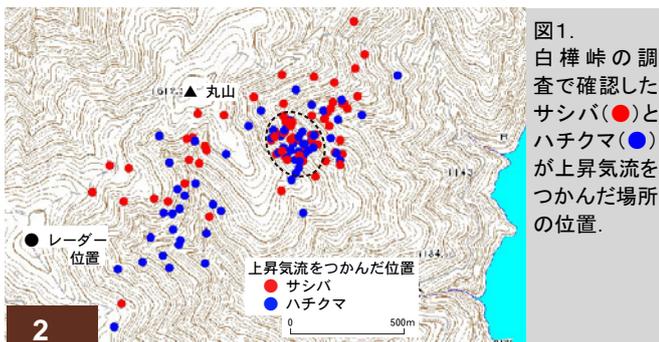


図1. 白樺峠の調査で確認したサシバ(●)とハチクマ(●)が上昇気流をつかんだ場所の位置。

あたってできる斜面上昇流を利用して高度を上げているのでしょうか？今回の調査ではいつも同じ方向からしか風が吹かなかったため、それを検証することはできませんでしたが、風向きが変わった場合に利用する斜面が変われば、斜面上昇流を使ってタカたちが高度を上げていそうだと結論付けることができそうです。今後の調査で明らかにしていきたいと思います。

時間帯で利用斜面が変わる？

次に、午前(8:00~11:00)、昼(11:00~13:00)、午後(13:00~16:00)に時間帯をわけて、サシバとハチクマが上昇気流をつかんだ場所を比べてみました。行動圏の解析によく使われるKernel法という方法があります。これは記録地点の集中度をもとに、重要なエリアを推定してくれる手法です。この手法をもちいてタカたちが上昇気流をつかんだ場所が集中している75%の範囲を図2に示しました。どの時間帯も丸山の南東側に上昇気流をつかんだ場所が集中しているのは同じですが、午後は丸山の南西側の西斜面もよく利用しているという時間帯による違いがあることがわかります。

上昇流には前述した斜面上昇流以外に熱上昇流があります。午前は東側斜面に太陽光があたり、東側斜面に熱上昇流ができそうです。反対に午後は西側斜面に日が当たり、熱上昇流ができそうです。サシバやハチクマが斜面上昇流と熱上昇流の両方を使っているとすると、午前は斜面上昇流も熱上昇流もおきる東側斜面でタカたちは上昇気流をつかみ、午後は斜面上昇流がおきる東側と熱上昇流がおきる西側の両方を使うということでこの時間帯による違いを説明できそうです。実際はどうなのか、もっと情報を集めて行きたいと思います。

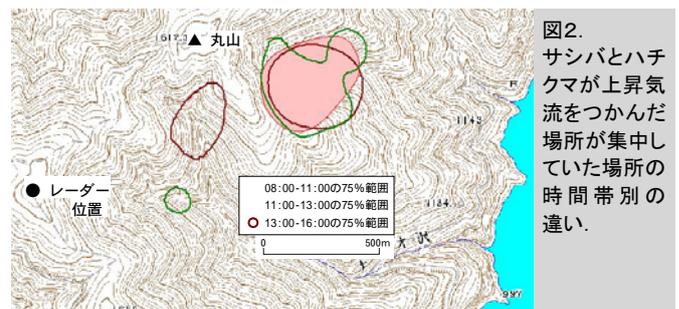


図2. サシバとハチクマが上昇気流をつかんだ場所が集中していた場所の時間帯別の違い。

今後は、白樺峠以外の場所でも情報を集め、今回の調査で見えてきたことが本当なのか、また天候の影響、種による違いをあわせて明らかにしていきたいです。

今回の調査では、バードリサーチで所有している光電社製の船舶用レーダーを使用しました。レーダーの画面は、下記のホームページで公開しているので、ご覧ください。

■レーダーを使った渡り鳥調査のページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_rader.html

引用文献

植田睦之・福田佳弘. 2010. オジロワシおよびオオワシの海岸飛行頻度と気象状況との関係. Bird Research 6: S21-S26.

研究誌 Bird Research よい

● 今月の新着論文

今月は2本の論文が掲載されましたのでご紹介します。

百瀬淳子. 2011. 2002年から2009年に全国から情報収集したアビ類の生息状況のデータ.
Bird Research 7: R1-R3.

この論文は新しい論文区分「調査データ」の最初の論文です。この区分では、論文としてまではまとめられないけれども死蔵させるのはもったいない体系的にあつめられたデータの公開を目的に設置したものです。

最初の百瀬さんのアビについてのデータは、日本で越冬するアビの分布と数についてアンケート等によって集められたデータです。陸の鳥の分布については、環境省の繁殖分布調査などの情報がありますが、海鳥については集団繁殖地の情報

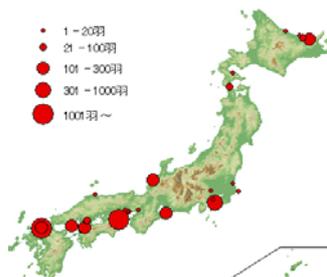


図1. 集まったアビの分布情報.

がある程度でほとんどまとめられていません。そんな中で、この情報は貴重なものになっていくと思います。

高橋雅雄・宮彰男・上田秀雄. 2011. 青森県仏沼湿原におけるリュウキュウヨシゴイの声の報告.
Bird Research 7: S15-S18.

すっかりBird Research誌の得意分野となった感もある鳴き声による生息確認の論文です。日本では南西諸島の鳥であるリュウキュウヨシゴイが青森県仏沼で記録された論文です。リュウキュウサンショウクイの分布拡大、シロハラクイナの新潟での繁殖といい、南の鳥が元気です。今後リュウキュウヨシゴイも本州で普通に見られるようになってくるのでしょうか？ヨシ原に潜んでいて目立たないこの手の鳥の確認においては鳴き声が重要です。

今回の仏沼で記録された音源が公開されていますので、これをお聞きになって、ヨシ原での鳥の観察の際には気に留めておいてください。

【植田陸之】

■ 仏沼で記録されたリュウキュウヨシゴイの鳴き声

http://www.bird-research.jp/appendix/br07/l_cinnamomeus.mp3

お知らせ

カレンダー実費でお配りします！

「今年もお世話になりました。来年もよろしくお願いたします。」のご挨拶のお供に、来年のカレンダーをバードリサーチで作成します。ハガキサイズの卓上カレンダーで、図のようなデザインです。写



図. カレンダーのデザイン.

真は会員の皆さんに提供していただきました。このカレンダーは、会員の方限定で、事前申し込みに関り実費でお配りします。カレンダー自体が1部500円程度になる予定なので、価格はこれに送料を加えた金額になります。カレンダーを希望される方は11月30日までに下記ホームページのフォームからお申し込みください。使用する写真もここに掲載してあります。【高木憲太郎】

■ バードリサーチ卓上カレンダー2012

http://www.bird-research.jp/1_shiryu/calendar2012.html

図書紹介

動物遺物学の世界によこそ！

邑井良守・藤井幹・川上和人 著／里の生き物研究会 定価4500円(税別)

野外で鳥の羽や骨を見つけたとき、種を同定したいと思うことがよくあります。こういう時に役に立つのは羽図鑑などですが、検索ができるようなものはありませんでした。ところが最近、かゆい所に手が届く画期的な本が出版されたので、ご紹介したいと思います。

本書では鳥の羽根だけではなく、獣毛や骨もとりあげています。簡単に同定に当たっての心構えに触れ、日本産の主要な種をとらあげて同定手順の説明があります。最後により広い種を対象にした検索表や、実物大の写真または図が載せてあります。羽根編では、目レベルの大分類は小さな綿状羽枝の詳細な構造を顕微鏡下で見ればよいということと、様々な部位の羽根があればさらに絞り込みができることが書いてあります。風切羽の以外にも同定法があるこ

とがわかりました。また、骨編では、骨折治癒の痕から個体についての情報が得られるという話も新鮮でした。また、日本産の主な鳥種の骨がほぼ実物大でずらりと並べてあるので、調べたい骨を隣に置いて較べれば、かなりの精度で同定できます。ちなみに私は砂浜で拾った海鳥の骨を本書と較べて同定することができました。

【黒沢令子】



トビ 英:Black Kite 学: *Milvus migrans*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長	♂604±25mm (560-636, N=11)	♀625±26mm (565-667, N=14)
自然翼長	♂466±18mm (440-485, N=11)	♀473±17mm (440-500, N=12)
露出嘴峰長	♂37.7±2.3mm (32.7-40.2, N=13)	♀37.9±2.1mm (34.2-42.3, N=14)
尾長	♂297±13mm (278-315, N=10)	♀305±17mm (280-330, N=13)
ふさ長	♂59.8±1.2mm (57.6-61.8, N=14)	♀61.7±1.8mm (59.5-65.1, N=14)
体重	♂857±186g (540-1100, N=13)	♀1132±168g (820-1400, N=13)

※北海道で採集された個体の計測値に基づく。

羽色:

頭部は赤褐色, 全身は茶褐色。羽装には個体差があるが, オスはメスに比べて腹部が白っぽく, メスは赤っぽく見える。これは羽毛の縦斑が雄はクリーム色, 雌は赤褐色をしているためである(岩見 1998)。幼鳥は成鳥に比べ胸のクリーム色の縦縞が太く, 尾羽根の先端もクリーム色の縁が目立つ(古賀 1996)。幼鳥から成鳥の羽衣になるまでは2年かかる。



写真1. トビ成鳥。

鳴き声:

ピーヒョロロロと澄んだ声で鳴く。雛の鳴き声を含めると約7種類の鳴き方が確認されている。繁殖期には帆翔しながらよく鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

ユーラシア, アフリカ, オーストラリア大陸に広く分布しており, 7亜種に分類されている(Brown & Amadon 1968)。日本では奄美以南と一部島嶼を除く全国に分布している。

生息環境:

トビは驚くべき適応力でさまざまな環境に生息しているが, 一般的には山岳地帯や広範囲に広がる森林地帯よりむしろ, 河川や湖, 湿地の近く, 港などの水域に近い場所を好む。国内では主に漁港や川幅の広い河川, 水田などが広がる農耕地などに生息する。北海道十勝地方では年間を通して平野部の都市部周辺から農耕地にかけて生息するが, 山間部でも採餌が可能なダム湖などがあれば, わずかではあるが生息している。

3. 生活史

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖システム: 繁殖期 非繁殖期

繁殖の開始時期は地域によって異なり, 最も早いのは九州の長崎県で2月(Koga *et al.* 1989), 最も遅いのは北海道十勝地方で3月である。一夫一妻で繁殖は毎年同じ巣もしくは同じ場所で行われ, 造巢行動は雌雄共同で行う。抱卵は採食のために交代する以外はほとんどがメスによって行われる。育雛期にはヒナが20日齢に達するまではメスが主に抱雛し, オスが餌を巣に運び入れる(古賀・白石 1987)。

4

巢:

一般に樹上で営巣するが, まれに人工建造物などにも営巣する(岩見ほか 1998)。北海道では営巣木にカシワやハンノキといった落葉広葉樹, カラマツやトドマツなどの針葉樹を好み, 地上から高さ7~21mの位置に枝を積み上げ, 厚さ平均60cmの巣を架けるが, 数年にわたって利用されている巣では最大2mほどの厚さになる。巣のサイズは外径約95cm, 産座直径約75cm。産座に用いる巣材は人工的なものをよく利用し, 最も多かったのが軍手で次いで靴下や布切れなど柔らかいものが多かった。近年スペインで行われた調査によると7~12才のペアは若齢や老齢のペアに比べて, 白いプラスチック片などを巣の上に置く傾向があり, こうした巣は他個体による侵入が少なかったという(Sergio *et al.* 2010)。巣材に人工物を利用するのは卵の保温や隠蔽以外の理由があるのかもしれない。



写真2. トビの巣とヒナ(上)。巣材には軍手や布が用いられている(下)。

卵:

一腹卵数は1~3卵で卵サイズの平均値は長径56.2mm, 短径44.8mm(N=8), 重さ59.1g(N=7)で, 色は一腹の中でも青みがかった白色の地色に赤褐色の斑があるものと, 無地のものがある。地色の青みは抱卵中に失われクリーム色がかった白色となる。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

抱卵期間は約32日, 育雛期間は平均52日だが, 育雛期間は餌条件やヒナ数によって大きく変化し, 最大で78日かかった巣もあった。巣立ち率は産卵数を確認できた274巣で47~65%(5年間)。餓死による死亡が死亡原因の51%と最も高く, 捕食による死亡は少ない。

渡り:

渡りについては, 日本国内では一部の猛禽類の渡り調査で確認されているのみで詳しい調査は行われていない。十勝地方において1994年から1998年にかけて主に巣内のヒナに対してウィングマーカーによる標識調査を行った。その結果, 幼鳥は8月頃から分散しはじめ, 9月には北海道東部の阿寒などで確認され, 11月には根室の風蓮湖で確認された例がある。出生地から最も遠い場所での記録は, 1994年に巣立った個体が翌年の3月に山梨県で越冬し, その後4月に青森県竜飛岬から北へ向かって渡るのが確認されたものである。また岩手県の海岸でも北海道から分散した幼鳥が確認された。このように幼鳥の一部は本州で越冬し北海道へ翌年帰って来ている可能性が高い。

4. 食性と採食行動

トビは魚食もしくは動物の死体を食べるスカベンジャーと思われるが, 繁殖期は鳥類や小型哺乳類, ヘビなどを積極的に捕食している。餌の種類は豊富で, 北海道で

は小鳥類のヒナを巣ごと捕獲し、巢内に持ち帰っているのも確認された。巢内の残渣から餌動物を調べたところ、44%が鳥類、次いで32%が猫や牛、豚、羊などの家畜であった。残渣からはヤチネズミやアカネズミなども確認された。このようにトビは、死体や魚だけではなく、それぞれの生息地域で手に入れやすいものを利用している。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 営巣環境と繁殖成績

営巣環境選択は繁殖を成功させる上で非常に重要である。十勝地方では繁殖の成績は営巣密度の高い場所では餌場となるゴミ捨て場などから近いものほどヒナの巣立つ時の体重が重くなっていた。しかし、繁殖密度が低い農耕地では営巣木のある林の樹木密度が低く、胸高直径の太い、つまり林齢が高い林に営巣している巣ほど繁殖失敗が少なかった(図)。繁殖失敗の



写真3. 十勝地方で一般的なトビの営巣環境。

の主な要因は悪天候によるヒナや卵の死亡とヒナの餓死である。餌条件が良い場所は営巣木が不足し、失敗の危険が高い樹林に営巣しなければならぬ。豊富な餌条件と安定した営巣場所のどちらを選択するかが、繁殖の成功を左右する大きな鍵となる。

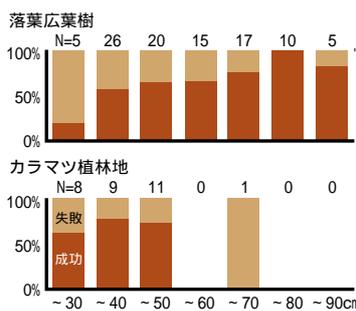


図. 営巣木の胸高直径とヒナを巣立たせることができた巣の割合。

● 空港に集まるトビとバードストライク

トビは猛禽類の中でも最も人為的環境に適応した種である。人の生活環境に近いところに生息しているため、人との軋轢が最近多く報告されている。最も深刻な問題は航空機との衝突事故、バードストライクである。大型の猛禽類であるトビと航空機の衝突は大きな事故につながりかねない。そのため空港などでは追い払いなどの対応に追われている。トビが空港に現れる理由の一つは日本の空港の多くが海の側にあることと、トビにとって安全な餌場となっているためである。滑走路の側の草地はよく刈り込まれ、餌となる昆虫も生息している。人が近づくこともなく、休息や採餌に好適な生息場所となっている。秋から冬にかけて大きな群れを形成しねぐらをとるため、集まってくる数も増えてしまう。空港にトビが集まらないようにするための対策が必要とされている。

● 餌付けが招いた悲劇

トビは人の生活圏に近い場所に生息しているが非常に警戒心が強い鳥で人との接触は避ける傾向がある。にもかか

わらず、最近トビが人を襲うといったことについて問い合わせを受けることが多くなった。主な地域は鎌倉と京都で、浜辺や河原で昼食をとる人々の食物を狙って襲ってくるらしい。しかしトビは本当に「人」を襲っているのだろうか？鎌倉に観察に行ってみたところトビは上空で餌を探し、狙った食物を持っている人の後ろから食物だけをかっさらって飛び去っていた。まれに人に脚や爪が当たることもあるらしく、怪我をしたという報告も聞いたが、私が見たところ餌だけを確実につかんでいた。必ず人の背後から接近しており、驚いた人が取り落とした食物を取って行くこともあった。人を襲っているというよりは餌だけに執着している。問題の起きている地域ではトビに餌付けをしたという話があり、人から餌をもらったトビに積極的に人の持つ食物を採餌する行動が定着してしまったと考えられる。トビが昼食をかっさらっていくという理由で駆除を提唱する人もいるが、かっさらわれないための対策は傘をさすなどトビに餌を見せないようにするだけというごく簡単なものである。海岸ではパラソルをさせばトビから食物を隠すことができる。人が餌付けてしまったために問題行動を起こすことになったトビたちを駆除するというのはあまりにも乱暴な話である。餌付けにはさまざまな議論がなされているが、このような悲劇をまねく餌付けは鳥を保護する上で禁止するべきである。

6. 引用・参考文献

岩見恭子. 2002. トビ. 野生生物のダイオキシン類蓄積状況等調査マニュアル. 財団法人自然環境研究センター. 18-28.

岩見恭子・池田翔・山崎里美. 1998. 高圧線鉄塔でのトビの繁殖例. *Strix* 16: 160-162.

Brown, L. & Amadon, D. 1968. *Eagles, Hawks and Falcons of the World*. Country Life Books, London.

古賀公也・白石哲. 1987. トビ *Milvus migrans* の育雛行動. *Jap. J. Ornithol.* 36: 87-97.

Koga, K., Siraishi, S. & Uchida, T. A. 1989. Breeding ecology of the Black-eared Kite *Milvus migrans lineatus* in the Nagasaki peninsula, Kyushu. *Jap. J. Ornithol.* 38: 57-66.

Sergio, F., Blas, J., Blanco, G., Tanferna, A., Lopez, L., Lemus, J. A. & Hiraldo, F. 2011. Raptor nest decorations are a reliable threat against conspecifics. *Science* 331: 327-330.

執筆者

岩見恭子 山階鳥類研究所 自然誌研究室

学部生の頃に十勝地方でトビの繁殖生態を観察し、大学院では営巣環境と繁殖成績について研究しました。騒音に対する猛禽類への影響評価で、オオタカの聴覚測定と騒音に対するストレスを研究する傍ら、北海道の猛禽類の営巣環境調査も続けました。近年はDNAバーコーディング事業に標本収集と製作で携わり、現在も山階鳥類研究所で、標本の収集および製作を中心に研究を行っています。



主に学術標本を作っています。

お知らせ

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト はじめます！

あなたの調査・研究を支援します！！

鳥類の調査・研究に特化した支援プロジェクトです。個人や企業から寄付を集め、寄付者による投票によって支援額を決定します。皆さまからのご応募を、お待ちしております。

● 応募するには・・・

1. バードリサーチの会員になっている必要があります。
2. 予算書はなし。お金を何に使うかも問いません。
3. 調査や研究のプランをA4用紙2枚にまとめて、バードリサーチに送ってください。様式はありません。一般の人にも分かりやすく、調査研究の面白さを伝えてください。この生態をあきらかにしたい、こんなことがきつとわかる。それでOKです。詳細は募集要項をご覧ください。

● 支援先に採用されたら・・・

4. 支援額は1万円～数十万円。多くはないです。
5. 会計報告は、必要ありません。支援金は何に使っても構いません。調査研究に必要なものにお使いください。
6. 成果報告も分量は多くありません。A4用紙2枚以上。様式はありません。
7. バードリサーチの活動へのご協力(ニュースレターへの記事の執筆, 研究集会での発表, 調査への参加など)をお願いする場合があります。

原資は個人の方などからの寄付です。支援額は、寄付者による投票数で決まります。

募集要項は下記のどちらかをご覧ください。

PDF(423KB)

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/BR-aid_plan.pdf

ホームページ

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/index.html

支援先と支援額の決定の仕組みとスケジュール

一次審査

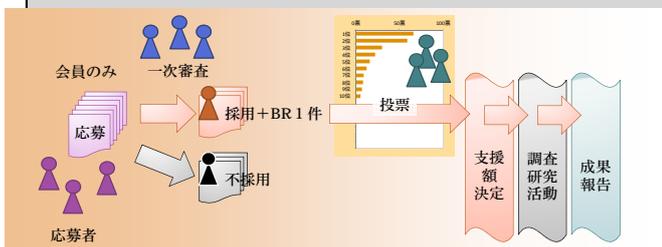
－12月下旬－

募集した調査・研究プランの中から9件を上限として支援先を選びます。資格がない者によるプラン、動物愛護や自然環境の保全に反するプラン、バードリサーチの方針と大きく異なるプランは、審査の対象になりません。

寄付&投票

－12月下旬～2月末－

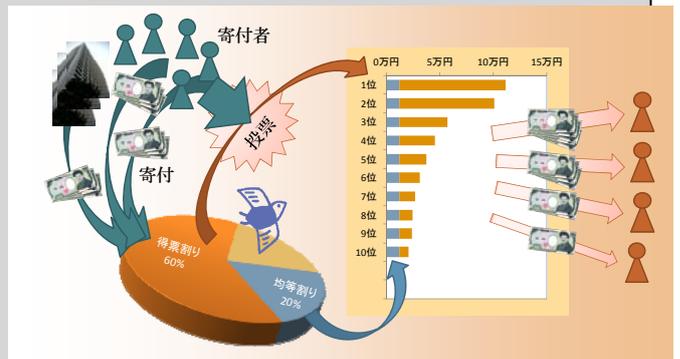
支援金の原資は個人の方や企業などから寄付を集めて準備します。各プランへの支援額は、寄付者による投票によって決定します。一次審査を通過したプランとバードリサーチの1件のプランが投票の対象です。



－3月上旬－

支援決定&贈呈

集まった寄付のうち2割を支援先に均等に分配し、6割を得票数に応じて支援先に分配します。残りの2割は、バードリサーチの活動全体へのご支援とさせていただきます。1件のプランへの支援額は、1万円～50万円程度を想定しています。想定を超える寄付が集まった場合は支援方法の見直しをします。



※) ルールはプランの応募数や投票数, 集まるプランの内容によって, 変更することがあります。

バードリサーチニュース 2011年10月号 Vol.8 No.10

2011年10月31日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: スズメ